
ある朝の風景

青春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある朝の風景

【著者名】

NO180E

【作者名】

青春

【あらすじ】

なんだか朝から言い合っている一人の風景です。恋愛風味だけどかなり極薄ですから。ジャンルが恋愛はちょっと間違いです。

「ふあー」

朝6時・起床

「まだ寝てたー……」

学校までは電車を使って20分。

近からず遠からず。でも起床時間から考えると短いものだ。

「寝る寝る、まだ寝るー。」

深夜番組見ていたから、あんまり睡眠時間は確保できていし。
それに、いまは春。あつたかくて、ぽつかぽかの、春ー。

でも

「こつまでねてんだよ。だらりんとじやねえぞ

わたしに田覚ましなんていらない。だって、田覚ましがいつも朝きてくれるから。

「うう……今日だけ、今日だけだから」

「それ、何度も田の『今日』だよ。起きる気がなになら俺が身ぐるみはがしてやつてもいいんだぜ」

「なつ、ななにをー?ばつ…、あんた、なんちゅーひとを……」

「お前の身体なんて興味ねーよ。だいたい、お前、鏡の前でもう一度自分を見直したほうがいいんじゃないの?」

失礼なことを言つ「男」はまじく自然にわたしの部屋に入つてきて、平然とした様子でオンナノコに対し失礼なことを言つ。ぜつたい、クラスメイトの女子に嫌われてるに違ひない！

こきなりお腹の辺りに冷たい感触がした。

「ひイー?」

慌ててセリを見ると、やつの指がセリに……つて、おもつとおおおー??

「お前ヤー、やつぱ、春休みに太つた?」

親指と人差し指で挟まれるわたしのお腹のお肉……
ふにふにとしたそれは、休み中のわたしの墮落の証だった。

「だつてだつて！受験ストレスから解放されたらケーキバイキングとか行きたくなるでしょー？」

「そーか？俺、あんま甘いもん好きじゃないし」

「ああ、もう！なんでもいいよ、いいから部屋から出て行って！」

彼の背中を押して無理やり扉の外に出そうとするのだが、やつときたら「あーあ、折角のお前が言つ『高校デヴュー』とやらは夢だつたようだな」と嫌味なことを言つてくる。

そこまでいわれて引き下がれますか！

「そうでもないのよねー。これでも？クラスメイトの小倉君とか、C組の飯田君とかと一緒に休み出かけないかって誘われてるのよねえ」

ふふん、とわたしは得意顔をつくる。

まあ、実際は彼らの田舎ではわたしじゃなくて、わたしの友達なんだけどね。トホホ……

わたしの言葉を聞いたやつは綺麗に片方の眉をあげると、探るように見つめてきた。

……見つめられるとか、なんかはずいんだけど……。

「そいつらって入学して初めて会つたやつらだろ？出合つて一ヶ月もしないのにそんな様子じゃ、どーせ遊びだろ。いくら男運がないからつて、早まらない方がいいんじゃないでしょうかねー」

「は、はああー？ わたしのどこのが男運ないつて！？……あ、そつかー。司くん、君ね、自分が女の子と縁がないから、わたしのことを恥んでるんだね？ あらやだー、可哀相」

口元に手をあてて「ピッ」と噴出してやる。大方、言つてることは相違ないでしょ。

「司といえば……結構本気で睨まれた。普段からよく睨まれるんだけど、当社比4割増しつて感じ？」

「…………悪いけど、俺は好きな女と毎日会つてこる。残念ながら、縁はあるんだろうな」

「へえ…………つて、あんたに好きな女の子とかいるの？！？？」

「つそだー！ ハイブリルフルはもうとひくに終わったぞー？」

「だって奥さん、司つてば歳の割りになんかちょっと達観してるところあるし、妙に老けてるし、恋愛とか興味ねえよみたいな人なん

ですよ？彼が会社員だったら絶対恋人よりも仕事をとるタイプですよ？

だけじ司の不機嫌そうな顔を見ると嘘とは思えない。

「ぐ、へえ。そ、それは、ぜひ恋がかなつといいわね……」

「てめえには言われたくないけどな。ま、とにかく……」

司は壁にかけてあるまだぴかぴかの制服をわたしに突きつけると、

「とつとと着替えろ、あねき」「

言葉の響きが耳慣れないものだったので一瞬眉を顰めてしまった。

あねき。
変換すると、

姉貴？

「うわ、呼ばれなれないって気持ち悪いね！」

「セレニまで言つかよ、ひでえな

「……司は姉貴つて呼ぶの嫌なんでしょう？」

「嫌味だ、嫌味。もう一度と言つかよ

なんだか[冗談でホットケーキの中に胡椒をまぜてみたのを食べた時と同じような顔だった。

「早くじひみ、 つな」

……うん。 こっちのほうが、 いいな。

「じっかしなー、 小学生に呼び捨てとは舐められても氣がするわね
ー

「中学だ、 中学。 もう小学とか卒業したわ、 ボケ」

(後書き)

連載にしたいんですけどこつになれる」とやう。

「こつらは多分義姉弟。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0180e/>

ある朝の風景

2010年11月18日02時41分発行